

中村友美(ナカムラ トモミ)
平成20年度1次隊 栄養士 ザンビア

プロフィール

滋賀県の学校栄養士を退職させていただき、今、私は南部アフリカにあるザンビア共和国へ栄養士隊員として来ています。3度目の正直でやっとつかんだ協力隊への道。この冊子も今まで読み手側だったのに、ついに自分の番がきたのかと思いながら、書いています。

ザンビアの気候や文化

さて、ザンビア。日本のような蒸し暑さも凍えるような寒さもなく、とても過ごしやすい国です。南半球にあるため季節は日本の逆。大晦日にプールにも入れちゃいます。雨季と乾季の大きく2つの季節ですが、その中でも寒い乾季(7月くらい)からちょっとずつ暖くなる、春のような季節もあり、この時期にはジャカランダという紫色のきれいな花があちこちで咲き誇っています。そして11月頃から雨季に入り、おいしい食べ物がたくさん路上に並びます。マンゴーにゆでたり焼いたメイズ(とうもろこし)キャタピラと呼ばれる幼虫やきのこなど。



雨季にはこのような大きなきのこを見かけます。田舎路を車で走っていると、きのこを売っている子が立っていることも。

活動や生活について

活動先は、国連世界食糧計画(World Food Programme)に配属されていますが、まだまだ勉強中。いろんな文書を読んだり、栄養士さんを訪ねて教えてもらったり。WFP やザンビアの栄養状態について、勉強の毎日です。

そんな中、WFPとUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)が共同で行う難民キャンプへの栄養調査に同行させてもいました。初めての出張はなんと1ヶ月の長期出張。期待と不安でドキドキでした。

ザンビアには現在4つのキャンプがあります。難民キャンプのイメージは？私はテントがあって…。昔見たようなテレビの印象のままでした。しかし、私のイメージとは全く異なり、オープンから9年～40年以上たった今の難民キャンプはひとつの田舎村のような生活。キャンプの中には学校やクリニックもあり、費用はすべて UNHCR が負担されているそうです。でも、収入がないことを一番感じたのは、衣服。ポロポロの服を着ている子どもが目立ちました。ある日、日本から送られてきたダンボールを見つけ、尋ねたところ、衣服とのこと。きちんと現場まで届けられていることが確認できて、ちょっ



メイズからシマを作るためにすりつぶし作業。でも私は下手で役に立ちませんでした。

と安心しました。

難民キャンプでの栄養調査は、1つのキャンプに約1週間滞在し、家族単位でインタビューをします。家族構成、就学状況、いつこのキャンプに来たか、食糧援助を受けているか、昨日の食事状況などなど。6～59ヶ月の子どもには身長・体重・上腕周囲測定・浮腫の有無・血液検査でヘモグロビン量(貧血をみる)を測定。現地語が話せない私の仕事は...身体測定やインタビューの補助、集まったデータの入力作業でした。そしてやはり気になるのは昨日の食事について。今はマンゴーのたくさん採れる時期で、1日の食事がマンゴーだけという家族がいくつもありました。他には、主食のメイズのみやメイズと野菜のみ。たんぱく質源はカペンタ(小魚)がちらほらあるだけ。1日1回しか食事をしていないことも多く、1日何も食べていないと答えた家族もありました。栄養と貧困問題、きっても切り離せない問題だけにその難しさをひしひしと感じています。

また、今回の出張で、ザンビアの田舎町に滞在し、普段の首都生活では体験できないこともたくさんありました。その中でも一番印象に残っているのが命をいただいているということ。山羊と鶏の解体を見る機会があり、鶏の解体は日本での訓練中にも経験しましたが、その時とは違う感じ方でした。自分が強くなったのか、ザンビアではあまりにも自然なことだからか。命をいただいていることを忘れず、すべての食べ物に感謝！

ザンビアへ来てもうすでに半年がたちました。ついこの前先輩隊員を見送ったのかと思ったらもう次の隊次の先輩が帰国。こうやってあっという間に自分の帰国のときが来るのでしょうか。悩むことも自分に凹むこともいやっというほどありました。でも、ザンビア生活とても楽しいです。協力隊になりたくてがんばっていた頃、支えてくれる日本の家族や友達、OVさん、職場の方々、そして、世界でがんばっている仲間たち、思い出しては元気をもらっています。ザンビア人のいいところをたくさん吸収し、ザンビアの空気をいっぱい吸って、大満足の笑顔で日本に帰れるよう、残りのザンビア生活もめいっぱい楽しみます。



栄養調査での身長測定の様子